

## 論文要旨と審査結果報告

### 戦後の世界食料・農業レジームと FAO に対する米国の関与

学位申請者氏名： 鵜戸口 昭彦 (DOC09007)  
論文提出日： 平成 27 年 5 月 11 日 (月)  
論文発表会開催日：平成 27 年 6 月 2 日 (火)  
審査委員会開催日：平成 27 年 6 月 2 日 (火)  
論文最終版提出日：平成 27 年 7 月 7 日 (火)  
学位名：博士(政策研究)= Doctor of Policy Studies

審査委員 (主査)：飯尾 潤 (本学教授)  
審査委員：白石 隆 (本学学長)  
審査委員：園部 哲史 (本学教授、博士課程委員会委員長)  
審査委員：鈴木 宣弘 (東京大学大学院農学生命科学研究科教授)

#### I. 論文要旨

本論文は、第二次世界大戦後に設立され、食料・農業分野における国際機関として活動してきた国連食糧農業機関 (FAO) の歴史的展開および機能変化に関して、国際レジーム論の視点を取り入れて、歴史的に解明しようとした研究である。FAO の通史として確立した研究がない状況で、さまざまな関係文献・資料をもとにして、総合的にその発展経路を記述し、そこに働く国際政治の力学を整理しつつ、記述・分析しているところに特徴がある。

第 1 章では、まず発足当初には農業・食料分野における国際機関として大きな役割を果たすことが期待されていた FAO が、他の国際機関などによって機能を代替されるなど、次第に役割を縮小させていったのはなぜなのかという問題意識が示されるそして、関係の研究分野として国際機構や国際レジームに関する研究、国際的な文脈での食料・農業分野における研究が紹介され、それらを踏まえて、この論文においては、戦後国際社会における食料・農業レジームの変遷を基盤として、覇権国である米国の動向に焦点を当てて、FAO の活動を歴史的に記述するとともに、いくつかの機能についてより詳しく検討することで、そうした疑問に答える事実の発掘や、背景にある力学を解明することを目指すという研究の方向性が示されている。

続く第 2 章では、FAO 設立の経緯やその後の変容について、歴史的に順を追って具体的な記述がなされている。そこでは、設立当初は先進国を中心に運営されてきた FAO が、1970 年代頃を境に開発途上国の意向が強く働く運営に変化するとともに、食糧の需給安定や、

国際的な援助といった機能は、FAO 批判の高まりとともに他の国際機関によって代替され、次第に活動領域が狭まっていく経緯が記述される。

第 3 章では、戦後の世界秩序を形成し、強大な影響力を持ってきた米国における国内農業政策の変遷、農産物貿易政策を中心とする国際的な食料・農業に関わる戦略、国際的な農業開発政策の変遷が順番に検討されるとともに、米国内のアクターであるとともに国際的な影響力もある穀物メジャーの実態に関して、その成長や経営の特徴、政策的影響力などが検討される。そして、それらを前提に、世界の食糧・農業分野の国際レジームが、19 世紀から戦前にいたる移住植民地レジーム、1940 年代から 70 年代にかけての農産物余剰レジーム、1970 年代から 90 年代にかけての農産物余剰レジームの崩壊期というように変化してきたことが示された。

こうした全体的な整理を前提に、第 4 章から第 6 章までの章では、国際的な食料・農業分野における 3 つのサブ分野が取り上げられ、それぞれにおける FAO の役割がより具体的に検討される。第 4 章では、食糧援助の分野において、当初は FAO の機能として期待されながら、農産物余剰レジームのなかで、食料を外交の手段として使っていくという戦略をとる米国がより使いやすい国際機関をもとめて、次第に貿易を扱う国際機関や枠組みを重視したことから、FAO の役割が低下していったことが示される。また、第 5 章では、開発援助の分野において、世界銀行や UNDP などの役割が増えるとともに、食糧・農業にかかわる開発援助についても、FAO の役割は小さくなっていったことが説明される。それに対して、第 6 章で扱われる、技術情報の共有などにかかわる国際フォーラム機能については、一時米国が FAO の機能を代替するような国際機関を機能させようとしたものの成功せず、こうした機能は現在においても FAO の機能として残っており、食糧危機などに際して一定の役割を FAO が果たす足場となっていることが紹介される。

第 7 章においては、前の 3 つの章で紹介された事例を比較することで、FAO の機能が他の国際機関に移転されたり、されなかったりすることが、どのような要因によって決定されていたのかが検討される。その結果、こうした機能の移転に関しては、いずれも米国の積極的な関与があり、とりわけ米国の世界戦略にとって重要な食糧援助と開発援助に関しては、国家平等型の FAO にゆだねることができず、時間をかけて WFP や世界銀行など大国優先型の国際機関に機能を移転させていったこと、ただしそれほど重要度が高くなく、政策の実施に直接関わらない国際フォーラム機能については、紆余曲折はあったものの、FAO に残されたということが明らかにされている。こうした検討を踏まえ、国際機能の形態と機能との間には、国家平等型の国際機構には国際フォーラム的な機能が適しており、加重投票などによる大国優先型の国際機構には決定・実施的な機能が適しているという適合性の傾向があるとされる。そして戦後、FAO に関して生じた機能移転の動きは、そうした適合性の傾向が実現される過程であったとされる。そして、政策的含意としては、そうした適合性の傾向を考慮した国際戦略をとることと、大国優先型の国際機関を補う意味で国際フォーラム機能を持つ国際機構の役割が重要であること、そうした機能の違う国際機

関が補い合って国際秩序が維持されるべきであることなどが述べられている

## II. 審査報告

6月2日の論文発表会において、本人から論文についての報告と審査委員との質疑応答があったのち、引き続いて審査会が開かれた。その場に出された意見は、おおむね次の通りであった。

1. 膨大な文献を読み込み、長期にわたって FAO という一つの国際機関の機能の変化や、その原因についてまとめたことは、それ自体として大きな学術的な意味がある。
2. 結論にいたる道筋もシステマティックで説得力があり、FAO という国際機関の性格と、そこで展開する政策過程について重要な結論を導いているだけではなく、国連機関とブレトンウッズ機関の対比や覇権国と国際機関との関係など、他の分野に対しても示唆を与えうる一般的な結論が導き出されており、大きな意義ある研究である。
3. FAO に関わる出来事に記述が限定されているが、その背景となる世界における食糧事情の変化などについても取り込んだ方がわかりやすい。また、米国の農業政策についての説明が 1990 年代で終わっているのも、その後の変化についてもふれるべきである。
4. 論文の主題とも密接に関わる FAO の事務局長選任プロセスや、事務局長の権力の源泉など、FAO 内部における制度や運営実態についての説明がほしい。
5. 他の国連機関への対応に比して米国が FAO に対して粘り強い対応をとっている理由や、米国の政権ごとの対応の違いなどについても、説明を加えた方がよい。
6. 重複によってやや冗長に感じられる部分や、項目間のつながりが悪い部分もいくつかあるので、その表現について手直しが必要である。

全体として、博士号に値する優れた論文であると全員の意見が一致し、上記のうち不足を指摘された諸点について修正したうえで、博士(政策研究)= Doctor of Policy Studies の学位を授与すべきであるという判断が下された。その後、論文修正後の措置に関して一任を受けた主査が、提出された最終版において所要の修正がなされていること確認した。